

# NPO法人ピアンソン会

ピアンソン記念館



夏の風物詩として、すっかり市民に定着した「グリーンコンサート」。地元小中学生やコーラスグループなどが出演する(写真右) できることは自分たちの手で。資料保存用の小屋を手づくりで建てる理事たち(写真下)



## 人のために尽くす。 宣教師の思い、いまに伝える。

### すべては人のために 人間愛伝えたピアンソン夫妻

アイヌ語で「地の果て」の意味を持つ野付牛(現・北見市)。この地に入植した人々の人生を「航海」に例えるなら、そこに「灯台」のごとく光を与え続けたのは、アメリカ人宣教師ピアンソン夫妻にはかならない。

夫妻は、宣教師として1888(明治21)年来日。その約5年後に北海道へ移り、1928(昭和3)年に帰国するまでの約40年間のうち、最後の15年間に北見で過ごした。布教のかたわら、廃娼運動やアイヌ民族援助に尽力する夫妻。いつしか夫妻の人柄は、宗教の壁をこえて人々に愛されるようになり、惜しまれながら帰郷した。

### 見る記念館よりも 心を伝える記念館として

『NPO法人ピアンソン会』は、ピ

アンソン夫妻の足跡や生き方を、少しでも多くの人々に伝えようと活動する市民団体である。会員は北見市内を中心に112人。北海道遺産に選定されたピアンソン邸(現・ピアンソン記念館)を基点に活動を続けている。記念館の運営はもちろん、夫妻が「三柏(みかしわ)のもり」と呼び愛した敷地内の樹木や、花壇の手入れも彼らの仕事だ。

「ピアンソン夫妻の業績を掘り起こし、現代に伝えていくことが私たちの使命」と語る、同会事務局長・伊藤悟氏。現代に欠けている「人のために尽くす」という生き方。そんな人生もあるということ、この記念館は教えてくれる。

### 記念館を全国に発信 文化・芸術の拠点としても

1914(大正3)年に建てられたピアンソン記念館は、すぐれた建築家でメンソレータムの近江兄弟

社の創設者でもあるW・M・ヴォーリズの設計によるものだ。06年には、全国のヴォーリズに関係する建築物や団体による、全国的なネットワークの組織づくりへ向けた計画が進んでいるという。「記念館がこれに参加することにより、全国的に知名度が上がれば」と期待が高まるばかりだ。また、記念館を文化・芸術の拠点にしようと、コンサートや企画展も積極的にに行っているという。

北海道遺産の選定を受け、これまで年間2000人程度だった見学者が、3倍以上に増えた。来館して初めて夫妻の偉業にふれ、その生き方に共感する人が少なくなない。「今後生きていく上での糧になりたい」。そう言い残し、笑顔で去っていく人もいるという。夫妻が残したメッセージは、その遺志を引き継ぐ者の手により、いまなお人々の心に語りかける。